

『好色五人女』の終着点

小 森 啓 助

本稿は要するに、『好色五人女』の主題論的な一つの解釈を試みることになるであろう。この作品については、従来も、同様の主題論的考察がいろいろ行われている。森山重雄氏（『西鶴の世界』）の批判のとおり、「主題論を別の主題論でいくら修正してみても、その程度は知れている」かもしれない。うっかりすれば、週刊誌の「虚構」をまじえた事件報告書とどういふ違いがあるのか、主題を主とするかぎりでは、その差異さえ明らかにできないで終わってしまうおそれも生じよう。本稿がもしも屋下に屋を架する結果にならないければ、幸いであると思つ。

一

さて『好色五人女』は、作者の抱く二つの相反する理念が中心となつて、物語が展開してゆく作品ではないかと、私は考えている。簡単にいえば、その一つは、主人公たちの行動を支持しようとする

気持であり、もう一つは、世間的な掟や道徳に従わねばならないとする考え方である。これは、作者自身のことばとして直接に示されることもあるし、また、間接的に、作中人物の言動によって示されることもある。主人公たちは、時として、めいめいの情欲に溺れて盲目的な行動をとる。しかし一方では、決して掟や道徳を無視しているわけではない。二つの間に挟まれて悩み苦しみつつ、破滅的な運命をたどつてゆくこととなる。五巻のどの語をとつてもよいのであるが、仮に巻三「中段に見る暦屋物語」について、この点を検討してみたい。

いふまでもなくこの話は、大経師の妻おさんと、手代茂右衛門との密通事件に取材したものであるが、第一章「姿の関守」では、娘時代のおさんが紹介される。「浴中に隠れなきさわぎ中間の男四天王」の鑑定に合格したのがおさんであった。安井の藤を見に出かけた多くの「見よき地女」のなかでも、「若しも我等が目、うつく

しきと見しもある事もや」との期待にそむかなかった美女である。

男どものいう「我等が目」のつけどころは、前を通る女たちの容姿や着衣・装飾品などの細部に及ぶ。容貌も当世風の好みにかなうものでなければいけない。一点かけていても、不合格の烙印が押される。しかし、誰にもわかる容貌や服装よりも、もっと大事な点がほかにある。「三筋緒の雪踏、音もせずありきて、わざとならぬ腰のすわり、あの男めが果報」と見られている「年の程三十四五」の女、「衣類の着となし、又有るべからず。……段染の一幅帯、むねあけ掛けて身ぶりよく」と評される「十五六、七にはなるまじき娘」、あるいは、「吉弥笠……白自慢にあさくかづき、中びねりのありすがた」が特に目を引く「廿七八の女」などにみられるように、多くは、身ぶりや歩き方に感じられるなまめかしさが、彼等の心を最も強くとらえているのである。これらの例でわかるが、年齢や既婚・未婚の別は、必ずしも審査の対象になっていない。衣裳にしても、単に豪華なばかりが能ではない。それぞれに一趣向をこらして、流行を追うというよりは、流行なんかにとらわれない斬新さが要点とされている。

おさんは殊にそうであった。「いまだ十三か、四か」の若い年頃であったが、「髪すき流し、先をすこし折りもどし、紅の絹たゝみてむすび、前髪、若衆のすなるやうにわけさせ、金髻にて結はせ、

『好色五人女』の終着点

五分櫛のきよらかなるさし掛け」たいきな姿が、まず目につく。衣裳は「白しゆすに墨形の肌着、上は玉むし色のしゆすに、孔雀の切付、見えすくやうに、其うへに唐糸の網を掛け、さてもたくみし小袖に、十二色のたゝみ帯」という凝りようである。といつて、いわゆる「衣裳法度」にふれるほどの贅沢品はあまり着ていないらしい。例えば天和三年正月の「覚」（御触書寛保集成）三十六「諸商売之部」には、

一 金紗

一 縫

一 惣鹿子

右之品、向後女之衣類に製禁之、惣て珍敷織物染物新規に仕出候事無用たるへし

とある。金紗・縫・惣鹿子の三種があがっているが、おさんの着物は、そのうちのどれでもない。ここに登場する他の女たちの衣裳には、「地なし鹿子」や「唐織」の帯なんかもある。これにくらべると、おさんの方は、どちらかといえば質素でさえある。それにもかかわらず、個性的な新しい工夫が、目のこえた男どもの注目を集めずにはおかない。右の「覚」にいう「惣て珍敷織物染物新規に仕出候事」に該当する意味では、明らかに法度の精神に抵触するだろう。巻のはじめには、「仕出し衣裳の物好み、当世女の只中、広い

京にも又有るべからず。」とある。そして「素足に紙緒のはき物、うき世笠跡より持たせて、藤の八房つらなりしをかざし」であらわれる。「見ぬ人のためといはぬ計の風義」であることは、作者の言を借りるまでもないが、見せてやりたいのは藤の花ではなくて、自身自身の姿にはかならない。第二章には、その時のおさんが「藤をかざして覚束なきさましたる人」であったという。男どもが「其名ゆかしく尋ね」と、「室町のさる息女、今小町」と言い捨てて行ってしまった。心にくい所作というべきであろう。

おさんは元来がこういう女であった。「さそふ水あらはいなんとぞ思ふ」(『古今集』巻十八、小野小町)式の風情を、年若くして、すでに身につけている。「いたづらものとは、後に思ひあはせ侍る。」は蛇足であろう。近松の『大経師昔暦』は、結婚前のおさんについて語るところがないが、「罪の匂い」ともいふべき「重大な過失への可能性」(『国語と国文学』昭和47年10月号、松崎仁)「大経師昔暦」の再吟味)をひそめていたことは、『五人女』のおさんについても、そのまま適合する。「後に」になって思いあたるのではなく、娘時代から、その危険性を予知することができる。

二

このおさんが「大経師の何がし」と結婚する。大経師側からのや

や強引な申し入れによるものとなっているが、大経師が「品形すぐれてよきを望」んで、思わしい相手が見つかりにくかった矢先、「覚束なきさましたる」おさんに心を動かされたのである。

西鶴は、大経師その人については、ほとんど何も書いていない。大経師とは何をする人であったのか、どの程度の身分や家柄の人であったのか、店はどのようであったのかなど、作品からは全くわからない。その身辺には、貞享改曆に際し、曆の発行権をめぐる営業上のいざこざが続いて、ついに家が断絶するに至ったと伝えられる(『近世文芸』22、諏訪春雄「大経師昔暦の実説」)。「五人女」に取り上げられた姦通事件後のことではあるが、これにも一切触れていない。名前さえ「何がし」ですませている。原文では、「さわぎ中間」のうちに、この人も加わっていたかのようにも読みとれる。姦通後、妻の不貞をどのようにうけとめ、どう処理するつもりであったのか、その点についても、作者から詳しい情報は提供されていない。格式のある家に起こった不名誉な出来事に対する配慮かもしれないが、要するに、大経師という人物は重要視されていないかたちになっている。姦通事件である以上、夫の大経師は主要人物の一人であるはずなのに、奇異な感じもたれる。

とはいっても、大経師が全く無視し去られているわけではない。いうまでもなく、大経師を軽く扱っているようにみえるのは作者で

あって、おさんではない。新婚当初は、一途に妻を愛し続けた夫であった。おさんもこれにこたえて、互いに仲むつまじく過ごしていた。姦通事件など起こり得べくもなかったはずである。しかし、三年たつて事件が発生する。夫の東下不在中であつた。実家の心配りで派遣されていた若者茂右衛門が相手である。おさんから見た茂右衛門は、もとより浮気の対象になる人物ではなかったが、いわば物のはずみで不慮の姦通を犯してしまうことになる。

おさんの結婚が、巻二「樽屋物語」のおせんの場合と同様、全く受動的で、愛情の自主性がなかったから姦通が起こつた、とする見解（陣坂康隆『西鶴・評論と研究』は当たらないであろう。大経師の側から一方的に求婚されたのではあるけれども、「夫婦のかたらひふかく、三とせが程もかさねける」二人の間に、いつまでも一方的な愛情しか育たなかつたと考えられるだろうか。三年もたては倦怠期ということもあるが、「次第に榮えて、うれしさ限りもなかりし」折から、これも疑わしい。原因はやはり、専ら、おさんの生まれながらにもつていた享樂的な性格にあつたことが、娘時代を知る読者には、自明のことからではないかと思う。「明暮、世をわたる女の業を大事に」、「始末を本とし」、「小遣帳を筆まめにあらため」ていた三年間のおさんは、火山の活動が一時休止していたのであろう。

『好色五人女』の終着点

夫の留守は、活動の再開に絶好の機会であつた。だが、上記のとおり、おさんは夫の存在を忘れていたのではない。事件は、茂右衛門に思いを寄せた女中りんの恋文を、おさんが代筆してやったことから始まる。おさんはその時、江戸の夫に出す手紙を書いていた。留守宅からの報告ではあるが、そのついでに、「りんがちわ文書きてとらせん」といつていることからすると、おさん自身の手紙もまた「ちわ文」の性質をおびていたかと想像される。最愛の夫をまぶたに描くなかで、いたずら心が複雑なたかぶりをみせたと解しなければなるまい。単に留守中の解放感だけではない。屈曲した異様な心理が解放感と競合して、無意識のうちに、使用人たちの情事に介入させてゆく。茂右衛門の返事がこれに油を注いだ。堅い一方と見くびつていた男から返ってきた、侮辱的な「うちつけたる文章」が、いよいよおさんを狂わせる。

あらためていうまでもなからう。人間の心理とはそんなものなのだ。西鶴は、おさんの二面性を読者に印象づけようとしている。娘時代の断面を紹介した第一章では、その奔放な情欲のきざしが、『源氏』以来の「品定め」の手法を借りて、鮮明に描かれている。作者は、これに対して、とりわけ批判がましいことをいってはいない。むしろ、最先端をゆく女の風俗を描写して、得意がっている様子うかがえる。非難めいたことばといえは、章末の「いたづらもの」

くらいであるが、これは前にも触れたとおり、「後に思ひあはせ侍る」といつているのであって、現状を「いたづらもの」と評したのではない。現状はどこまでも肯定的に書かれている。

ところが、第二章初めの結婚当初のおさんを描く段になると、第一章とは正反対の、他の一面のみが強調される。そして、この場合も作者は、その打って変わった地女房ぶりを揶揄したりするのはなく、明らかに賞賛する側にまわっている。「町人の家に有りたきは、かやうの女ぞかし。」という賛辞を素直にうけとらざるを得ない。つまり、是非善悪の問題ではなくて、人間の内にある相反する二面が、どちらも作者によって肯定されているのである。

茂右衛門についても同じことがいえる。律義一方の、野暮くさい男だと思われていた茂右衛門である。たしかにその律義さを、巻末に至るまで、茂右衛門は保ちつづけている。その野暮天にしているから、人間としての二面性から逃れることができないのだ。りんの恋文を手にして、「おもしろをかしきかへり事」をする術も心得ていた。二度目の手紙が来ると、「哀ふかく」もなってしまう。あとのこととなるが、「約束」の夜の行動や述懐をみても、世間並に一人前の「男」なのである。女中どもと一しょになってからかうに手ごるな相手としか、茂右衛門を理解できなかったらしいおさんだが、「いたづら」女の胸中に茂右衛門の「男」が忍び込んできているの

を、おさん自身も気づいていない。過ちは必ずしも過ちではなかった。

三

事終わって、おさんは、「よもや此事人にしれざる事あらじ。」との理由で、「此うへは身をすて、命かぎりに名を立て、茂右衛門と死手の旅路の道づれ」と決意するに至る。しかし、前後の事情からすると、この心境の変化は、読者にはやや唐突な感じがするだろう。「毒を食らわば皿まで」の心理というだけでは理解しにくい。

密通が極刑を以って処罰されたことはいまでもない。おさんとて百も承知であっただろう。特にこのような主人の妻との場合は、のちの「御定書百箇条」においても、「死罪」以上の、きびしい極めが追加されている（『科条類典』下、四十八「密通御仕置之事」・『棠陰秘鑑』同条参照）。実説でも、二人は洛中引廻しの上、磔にされたと伝えられる。ただし、密通は「火付・盗賊・人殺」などの犯罪と違って、「御定書」の条文では、「内済」が認められる可能性もあつた（石井良助『第四・江戸時代漫筆』）という。もっともこの場合、その可能性があつたかどうか、保証のかぎりではないけれども、最初の段階ならば、まだ夫にわびを入れる余地が全くないではなかつたかとも思われる。意外な成りゆきに動転したおさんは、

冷静に善後策を講ずるいとまもなく、さらに「罪」を重ねてゆくこととなった。

それにしても、おさんはなぜ茂右衛門ごとき者と「命かぎり」の「道づれ」を決心し、「なほやめがたく」なるのか。相手はおさんにとつて、軽侮の対象にしかならない男であつたはずである。おそらくは、たとえ仮眠中の出来事であつたとはいえ、その瞬間から、おさんの茂右衛門に対する認識が変わつたのではないか。いままでは茂右衛門の一面しか見ていなかったおさんが、初めて他の一面に気づいたのである。果たせるかな、おさんの「心底」を聞かされた茂右衛門は、「君をおもへば夜毎にかよひ、人のとがめもかへりみず」に、「身をやつす」男に変身する。まさに「世にわりなきは情の道」というほかはない。

出奔した二人は、まず琵琶湖に出て、「京よりの追手」を気にしつつも、「いつ散るべきもさだめがたし」と、湖畔の旅を楽しむ。二つの心理が同居していたが、やがて、「仏国のかたらひ」よりも現世で生きのびることに相談が一決し、巧みな偽装工作によって、投身心中をしたと見せかける。「我く悪心おこりて、よしなきかたらひ、是、天命のがれず」という遺書は、半面の本心を告白したものと認めねばなるまい。しかし、「いかなる国里にも行きて年月を送らん。」と提案する茂右衛門と、五百両もの金を携えてきたお

『好色五人女』の終着点

さんとは、他の半面においても、完全に意気投合していた。

「丹波越の身」となつてからも、駈落ちという行動にまで発展してしまつたことに對する反省や悔悟の念と、強いてこれをほねのけようとする気持とが相交錯する。難路をたどりかねるおさんは、もはや「天命」を待つばかりの状態であつた。茂右衛門の「今すこし先へ行けば、……此浮きをわすれて、おもひのまゝに枕さだめて語らん物を。」のひと言に励まされて、「うれしや、命にかへての男ぢやもの。」と、ようやく気をとりなおす。「魂にれんほ入りかはり、外なき其身」でなくてはかなわぬことである。茂右衛門にしても、口先ほど自信があるわけではない。柏原で難題をもちかけられた時には、「近江の海にて死ぬべき命を、ながらへしとて、天われをのがさず。」と観念して、脇差を手にする。自害か刺交えかを覚悟したらしいが、今度は、おさんの機転で危く難をのがれ得た。

切戸の文珠堂における「霊夢」が、二人の内心の煩悶であることは、いまさららしくいう必要もないことであろう。同時にそれは、世人のうけとめ方を代表した、作者の見解を述べたものにほかならない。巻一でおなつの夢にあらわれた室の明神の「御告」と同じ手法である。文珠菩薩は、「汝等、世になきいたつらして、何国までか其難のがれがたし。」とたしなめた上で、「悪心去つて菩提の道にいらば、人も命をたすくべし。」とさす。一般の通念に従えば「い

たづら「悪心」である。仏道に救いを求める以外、罪を償うすべ
 はないと本人たちも考えていたが、はげしい愛欲の力が、この世俗
 的な道に妥協することを拒否した。「文珠様は衆道ばかりの御台点、
 女道は曾てしろしめさるまじ。」との強い反発が、即座に、同じ夢
 の中で宣言されているのである。その反発は、ここまでできてしまっ
 て、もはやどうしようもない虚勢とみるべきだろう。だが、文珠の
 お告げが本心の告白であるならば、この虚勢もまた本心であったに
 ちがいない。二人の駈落ちは、単なる愛の逃避行ではなかった。倫
 理の絆をたち切ろうとする心と、どんなにしても拭い去りがたい罪
 の意識と、この両者が危なっかしい一種の平衡を保つなかで、道行
 が進行する。

京都では、事件もすでに時効にかかりかけていたが、ようやくた
 どり着いた丹後も、おさんらにとって安住の地とはなり得なかつ
 た。いつまでも続く内心の葛藤が、茂右衛門をして「無用の京のぼ
 り」をさせる。世上の評判が気がかりであった。まず「住み馴れ
 し」町に入って様子をうかがうと、「さてもく、茂右衛門めは、
 ならびなき美人をぬすみ、をしからぬ命、しんでも果報。」「いかに
 もく、一生のおもひ出。」という会話が聞こえる。いまの茂右衛
 門の片方の耳には快く響いたかもしれない。しかし、人の噂はまち
 まちである。「此茂右衛門め、人間たる者の風うへにも置くやつに

あらず。主人夫妻をたぶらかし、彼是ためしなき悪人。」との評も
 また聞きのがし得ない。「哀をしら」ぬ「分別らしき人」が「義理
 をつめて」すれば、こういうことになるだろう。どちらもわが胸
 中の核心をつくことはなのだ。作者は世評を通じて、楯の両面を認
 めようとす。どちらを是とし、どちらを非とするのでもない。双
 方が矛盾したまま並立するのが、人生の姿なのである。

そのなかで、二人の生存説を唱える者がいた。身があぶない。是
 非を超越した冷徹な事実を指摘されて、茂右衛門は早々に引きあげ
 る。宿にいても落ち着かない。「しのびく」に「芝居小屋に入って
 みれば、観客の中におさんの旦那がまじっている。「ぢごくのうへ
 の一足飛」で丹後に帰ってしまうが、栗商人の通報によって、局面
 は間もなく急転回し、既定の結末を迎えることになる。二人にとっ
 て、すでに覚悟はできていたことであろう。

九月廿二日の曙のゆめさらく「最期いやしからず、世語とはな
 りぬ。今も浅黄の小袖の面影、見るやうに名はのこりし。
 というのはなむけのことはは、「天命のがれず」に終えねばならなかつた短い生涯に対する、作者の複雑な気持を表明しているように思
 われる。

以上、仮に巻三について考察してきたが、同様のことがらは、他の巻々においても容易に指摘することができよう。くどくどしくなるのを避けて、詳細は省略したい。ただし、巻三のみ例示して、各巻ひとしなみにそうだと結論してしまつては、若干の粗漏を免れないと思つので、念のために、巻四・巻五の主人公男女について、少しばかり補足しておくこととする。

巻四のお七は、かなり早熟で、親が監視の目を離し得ない、衝動的な娘であつたように西鶴は書いている。社会的な掟を守ろうとする意思が反面にあつたとは、はっきりいっていない。しかし、子細にみると、やはり例外ではないことが知られるのではないか。例えば、避難先の寺院で貸与された振袖をみて、年不相応に無常を感じる殊勝さをもつていた。吉三郎に対しても、最初は一目惚れであつたが、素性や人物を知つて、一層思いを募らせる。意外に慎重な面もあつたのだろう。はじめて吉三郎のもとに忍び入る場面、のちに再会する場面、そのどちらにおいても、寺の住職あるいは両親のつがめを意識している。それ相当の罪悪感をもつていたのだ。その点、吉三郎も同様である。

さらに、放火後の二人の描き方に注目しなければならない。放火そのものは至極あっさりと片づけ、例のとおりの教訓的言辞を付け加えるにとどめてゐる。これは、お七に深い思慮がなくて「悪事」

『好色五人女』の終着点

に突っ走つたことを証するための筆法でもあらうが、そのあと文章が一転して、処刑を待つ間のけなげな態度を絶賛し、心をこめてそのふびんな最期を哀惜する。どの巻にも多かれ少なかれ出てくる詠嘆的口調だが、この巻ではとりわけその度合が強い。といつても、別段、お七の行為に感激したり共感したりしているわけではなく、事情はともあれ、あつぱれな最期であつたという素朴な庶民感情から発するものだといわねばならない（『近世文芸』15、谷脇理史「好色五人女」論序説）だろう。だが同時に、それは、年若い娘であるにもかかわらず、こうして深く処刑の座についたくらいだから、その向う見ずと思われる行動のなかに、必ずやつねに自らを抑制する心を忘れていなかったにちがいない、と主張したい作者の内意を示唆するものではなからうか。

続いて文面は吉三郎の身辺に移るが、吉三郎についても、お七に対するのと同様の作者の意向がうかがわれると思う。男色関係がからんで少し複雑になるので、いまこれを問題にするいとまがないが、要するに吉三郎もまたお七に劣らぬ心がけの男であつたことへの立証が、一章半に及ぶ記述の主眼点であらうと解されるのである。

巻四に関しては、簡単ながら以上で、一まず終わり、次にもう一つ、巻五を検討してみる。源五兵衛は、「明暮若道に身をなした」た、

「田舎には稀なる、色このめる男」であった。おまんも「源五兵衛男盛をなづみて」、強引に押しかけてゆこうとする。この巻は最後の一章を除いて、源五兵衛の異常な若道への執心とおまんの執拗な行動とが追及されている。それぞれにわが道をゆくことに夢中であって、世間的な掟や道徳には全く自由であり得たようにもみえる。だが、これも実際はおそらくそうではなかっただろう。近所の人からは「世にはかゝるうつけも有ものかな」(第五章)と思われていた源五兵衛であるが、人間自体は決して世評のような「うつけ」ではなく、誠意のある、しっかりした人物ではなかったか。作者は、

世間一般の女が夫と死別したときにどういう態度をみせるか、「世の中に、化ものと後家たてすます女なし。」とまで極言したのち、若衆二人を相ついで失った源五兵衛の「誠なるこゝろ」を「殊勝さかぎりなし」と評している。一方のおまんも、他からの縁談を「うたてく」「おもひの外なる作病」までして「乱人」とみせかけた。それくらいだから、これまた、水準以上のしっかり者だったと思われる。まして両者とも、富裕な家に生をうけた、いわゆる良家の子弟子女である。両親にそむいて家出まで決心するのは、並々のことではなかっただろう。世間に対する意識は人一倍強烈であったとみなければなるまい。ことあらためて作者に教えられなくても、読者には十分推察がつく。「つらき世間」も身の因果と定めて自活の道は

たてようとした二人が、時代の重圧に無関心であり得たはずがないのである。

五

結局、五組の男女は、決して表面的な行動によってみられるほど、気随気儘に振舞い得たのではない。さまざまなかたちで彼等の前にたちはだかる社会の規範に、きびしい制約を受けねばならなかったのは当然のことである。当時において、それは「天」に対する畏怖に等しい。彼等の生の掟は「天」によって規定されるが、その安全もまた「天」によって保証されているという信念があった(『日本文学』66年2月号、森山重雄「近世文学の意味」)。掟に刃向かうことは「天」に挑戦することであり、「天」の冥加をみずから放棄することである。

だが、「五人女」の主人公たちは、例外なく、欲望を達成するために、捨て身の非常手段をとろうとする。巻一のおなつ・清十郎は、しめしあわせてあわただし密会をとげ、駈落ちを企てる。巻二のおせんは、些細な屈辱を根にもち、火中の栗を拾おうとした。巻三には「丹波越」がある。巻四のお七と吉三郎も、互いに危険を冒して逢う瀬を楽しみ、お七はついに放火の罪にまで問われた。巻五のおまんは、若衆姿に身をかえて源五兵衛を陥れてしまう。

いずれも、『五人女』では読者をはらはらさせる場面であるが、その一部は実説もしくはそれに近いものであったにせよ、大部分は作者の創作によるものと思われる。西鶴の最も力を注いだ部分であろうが、必ずしもそれは、得意の筆を駆使して読者の興味を引こうとしたばかりのものではあるまい。おそらくは、きびしい掟を前にして、目的のために手段を選ばず余裕がなかったことを示そうとしたものであろう。そして、それらの手段が一時的には成功を収めることがあっても、いずれは、これまた例外なく、すべて不幸な結末を迎える。いかに大胆な行動を試みても、天理に反する道は閉ざされている。予想どおり「壁」は厚かったのである。万に一つの僥倖も訪れはしない。

そのなかで、巻五のみが、最終的には、思いのほかの幸運に恵まれることになっている。このおまん・源五兵衛の物語は、時代も古く、所伝が乏しい。『五人女』に書かれているようなことが少しくもあったのかどうかはわからないが、少なくとも、ここに記するようなハッピー・エンドではなかっただろうと推測されている。そして、西鶴がこの巻のみをハッピー・エンドにしたのは、俳諧の揚句、ないしは、浄瑠璃等の最終段の祝言にならったものであろう、というのが一般の通説である。

しかし、この物語をハッピー・エンドとみなすこと自体が、第一に

『好色五人女』の終着点

疑問ではないか。二人は山を下りて町はずれに「しのび住ひ」をしたものの、「何か渡世のたよりもなく」、生活は極度に窮迫する。うる覚えの大道芸くらいでは食っていけない。身から出た錆、心中でもする以外ないところまで追いつめられる。ところが、どたん場の「けふをかぎりとなりはてし時」に、おまんの両親に探し出され、「菟角娘のすける男なれば、ひとつになして此家をわたせ」と、巨万の財産を譲渡されることになった。めでたし、めでたし、なのだけでも、実は、話はこの直前で終わっているはずであり、そのあとは、本来の物語とは別の、全く付けたりの「祝言」にすぎない。『伝奇作書』の「中興世話早見年代記」にも「心中」と伝える。いかに遠国の古い話素材を借りたからといって、西鶴がこの巻だけを例外としてハッピー・エンドに仕立てたとするのでは、『五人女』創作の意図がどこにあったのか疑わしくなってしまう。天理に背いた者が幸運に恵まれては、読者が承知しないであろう。

譲られた財産の目録を一瞥すればわかることである。一番目の「判金貳百枚入の書付の箱六百五十」だけでも、「一代男」世之介の二万五千貫どころではないが、「庭蔵」にまではみ出した莫大な物資から、さらに「人魚の塩引」以下「えびす殿の小遣帳」に至るコレクションの数々が列挙されている。もちろん、実在の可能性はない。西鶴は明らかに一つの夢を書いた（『日本文学』74年1月号、

植田一夫「好色五人女」論」のである。もしも読者が最後の「祝言」で、明るい救われた気持になり得たとしても、世の中はそんなに甘くはできていないことに、すぐ気づいたことであろう。夢は忽ちにして消え去っていったにちがいない。巻を閉じて、読者の胸裡を去来したものは何か。手段と方法を尽くせば、厚い「壁」も破り得るという自信ではなかっただろう。途方もない夢が実在性をもたないかぎり、おまん・源五兵衛の幸運は突破口にはならない。おそらくは反対に、深い絶望観のみが、読者の心を占領して離れなかったことと思う。最後の「祝言」は逆説的表現である。人の力ではどうにもならない重苦しさが、このようなしめくり方を以って訴えられているのだとすれば、この作品もまた、一種の「転合書」であったとしなければなるまい。(本誌創刊号、拙稿「日本永代蔵」の思想と表現」参照)

ところで、「好色五人女」の題名は、当時「五人女」ということばが一種の流行語として用いられていたのに、ヒントを得たのではないかと推測されている(岩波文庫本「好色五人女」解説)。とはいえ、そもそも男女の物語であるのに、なぜ特に「女」を掲げたのか。いうまでもなく、男に解放されていたものが、女には閉ざされていたからであろう。「好色」といっても、『一代男』なんかの場合とは意味が違う。単数の相手に対する愛欲か恋愛感情かの程度であ

るが、それさえ、女にあっては罪悪と考えられがちな時代である。本書の女主人公のごとき行動をとった例は稀であったにちがいない。稀であるからこそ、芝居や歌祭文の材料ともなったはずである。しかし『好色五人女』は、勇敢に愛欲の解放を試みた、これらの人たちへの感動のみがモチーフであったとは思われない。封建時代の作家として、あからさまに抵抗の精神を示すものでもないであろう。むしろ、訓戒的な言辞ばかりを重視することもできない。あるいは、篇中にみられる人情・世態の描写が主眼点であったとも断じがたい。

感動と思われるものは、世代を異にする中年男が卒直に抱いた驚きではないか。ことによると、多少の羨望の気持が加わっているかもしれない。抵抗ということがもしあったとするならば、苛酷な状況下における絶望感を、あのようなかたちでしか表現するほかなかった「転合書」の精神にのみ求められることであろう。幻の幸せを夢みるなかで、主人公たちが、欲望と掟とに両足を引っばられた内面の苦悩を続ける。過ぎ去った事件であるから、結末の変更は作者にもできない。捕えられたり処刑されたりする経緯には、関心もてなかったであろう。西鶴は、周知の事件を素材に創作の筆を進めるにあたって、それらの個所は極めて簡単に端折り、内心の葛藤を克明に描こうとつとめた。ややもすると通俗的な興味本位的な衣が

着せられているが、だからこそかえって、作者自身の苦悩もまたお
おいかくすべくもなかったのではないかと思う。

付記

本稿は、前稿『好色五人女』の出発点（本誌第4号）と、標
題の上では首尾呼応しているが、内容上は必ずしもそうではな
かったことを断っておく。

（一九七四・九・三〇）